

節分会・星祭

日本周辺の寺院や神社では、2月3日に立春を祝っている。これは、昔の太陰暦での新年の始まりに相当する。圓教寺では、この祭りを節分と呼び、文字通り季節の分かれ目である。厳粛に祝賀式典が行われる。午後1時に摩尼殿の住職が行う神聖な護摩焚き儀式が始まる。この式典は、その年は不運と見なされた星の下で生まれた人々の厄払いを行っている。住職は、東アジアに広がる伝わった伝統に従って、悪星を善星に変える儀式で健康、長寿、繁栄を祈願する。星への関心は、圓教寺と天から世界を見下ろすとされる観音菩薩と深く結びついている。この特別な行事は「星まつり」としても知られている。

午後には、智慧の王である不動明王（サンスクリット語：アカラ）を称えるための密教の儀式が行われる。不動明王の恐ろし気な姿は、その限りない慈悲の心とはまったく対照的である。行事は、その年の星の生まれの3~4人の男の子が、寺院の管理者や多くの僧侶の助けを借りて豆の入った袋を配る摩尼殿での「豆撒き」で締めくくられる。この伝統は、「豆」（マメ）が寺院の敷地から「魔滅」（マメ）に役立つという信仰から来ている。この儀式に備えて、摩尼殿の主祭壇には8,000袋の豆袋が祝福されている。これらの豆袋は、参拝者に対してつかんで投げられる。この豆撒きは圓教寺では特に人々を興奮させている。袋には現金、籤の引換券、金と銀の観音菩薩像の引換券、その他の賞品が含まれている。地元の学校の子供たちは、イベントに参加できるように、その日の授業は早めに終了する。

豆撒きに似た習慣に、鬼の格好をした身内の男性に人々が豆を投げるというもので、圓教寺や全国で家庭で行われる伝統的な節分がある。地元の学校の子供たちは、その日のうちに授業から解放されるので、参加することができる。この圓教寺の立春の行事は、毎年1月18日に行われる平和と五穀豊穡の修正会の延長線上にあるものと考えられる。二つの行事の目的は、悪霊を追放し、繁栄する年が来ることを祈るものである。